

「新日鉄のDNA」を受け継ぎ、 トップを目指すー堺ブレイザーズ



2006年3月18日、第12回Vリーグで堺ブレイザーズが優勝した。新日鉄バレーボール部時代からは8年振り、6年前にクラブチーム「堺ブレイザーズ」となってから初の快挙となる。優勝インタビューの際、中垣内祐一監督は「常勝新日鉄のDNA」を証明できた」と述べた。その新日鉄のDNAとは一体何だろうか？ また、そのDNAを受け継ぎながら、どのような進化を遂げているかを探り、日本の企業スポーツにおける課題、日本のスポーツ普及についても触れる。



堺ブレイザーズの前身である新日鉄バレーボール部は、1939年日本製鉄時代に八幡を本拠に創部された歴史あるバレーボールチームだ。1964年の東京オリンピックでは3人が代表選手に選出され、1967年の日本リーグ（Vリーグの前身）では、初代チャンピオンに輝いた。

堺製鉄所に拠点を移した後、人員が減り一時的に戦力が低下したが、その後の厳しい練習によって、小田勝美、柳本晶一、田中幹保、植田辰哉、真鍋政義、中垣内祐一をはじめとする日本を代表する選手を輩出した強豪チームとしてその名を馳せた。日本リーグとVリーグの39年間で、15回もの優勝を飾っている。

新日鉄堺製鉄所長で(株)ブレイザーズスポーツクラブ最高顧問の藤井康雄は、新日鉄と堺ブレイザーズの共通するDNAについて次のように語る。

「新日鉄のバレーボールには、常に日本のバレーボール界のトップであり続けたいとの強い意思がありました。その意思があるからこそ、有名選手を採用しなくても、たたき上げの

選手をしっかりと育て上げ、次代の指導者を次々に作ってきました。さらに、分業制バレーなどの新戦法の導入やビデオ編集、バレーボール界で初めてクラブチーム化を達成するといった新システムをいち早く取り入れる変革もできました。

新日鉄も鉄鋼業界でのナンバーワンを追求する姿勢をさらに強く持たなくてはと思います。その姿勢が、ものづくりに



堺製鉄所長
(株)ブレイザーズスポーツクラブ
最高顧問
藤井 康雄



堺製鉄所総務部長
(株)ブレイザーズスポーツクラブ
代表取締役社長
池上 僚一

不可欠である地道な人材育成、ビジネスにおけるイノベーションを推進していく精神へとつながっていくのです」

2000年、新日鉄ではスポーツ事業運営の見直しを図り、他の企業スポーツが休部していく中で、所有から支援へとその考え方をえ、クラブチームとして挑戦していくこととし、本拠地の堺市に密着したクラブチームとして、新日鉄全額出資の(株)ブレイザーズスポーツクラブ（以下、BSC）を設立した。チーム名は、地元の「堺」と製鉄所にちなんだ「炎の男たち」を意味する「ブレイザーズ（Blazers）」を承継し合わせて「堺ブレイザーズ」として、新たなスタートを切った。

しかし、なかなか勝てない時期が続いた。運営も手探りの中、発足当時、堺ブレイザーズは3年で終わるとさえ言われた。堺製鉄所総務部長でBSC代表取締役社長の池上僚一は、製鉄業と同様、当たり前のことを地道に続けてきたことが今回の優勝につながったと語る。

「勝てなかった時期に何をしていたか、反省点を中垣内監督にリストアップするように指示しました。40項目も出てきましたが、そのほとんどは挙げてみれば当たり前のことでした。今回の勝因は、当たり前のことを地道に努力してきた成果だと思います」

第12回Vリーグ優勝！

負けられない気迫で臨んだVリーグ

2006年3月18日、大阪市中央体育館で行われていた第12回Vリーグ男子決勝で、堺ブレイザーズがサントリーサンバーズに連勝し、クラブチーム化後、初の優勝に輝いた。選手時代には何度も優勝経験をしてきた中垣内祐一だが、監督に就任した昨年は6位と低迷した。今回、満員の大阪市中央体育館で優勝を決め、ガッツポーズで選手に胴上げされた。

「クラブチームとしての優勝で、ファン、サポーター、スポンサーなど、より多くの皆様と喜びを共有することができました。“新日鉄のDNA”は、地道な練習に裏打ちされた確かな技術力と勝つことに対する鉄の意思、泥臭いまでの行動力として引き継がれ、今回の優勝にもつながったと思います」（中垣内監督）。

開幕から4連勝したものの、杉山マルコス選手など主力選手のけがにより不調の時期が続いた。

「これまでは、急上昇、急降下して安定性に欠け、不調になるとそのまま浮上できないことが課題でした。それが、石島の加入によってチームの雰囲気が変わり、徐々に調子を上げてきました。指導方針としては、2年目からはあまり怒らず、その代わりコミュニケーションをとって風通しよく、柔軟な部分をバランスよく出していくようにしました」（中垣内監督）。

その後はファイナルラウンドに向けて調子を上げ、9連勝で優勝を決めた。チームをキャプテンとして引っ張り、最優秀選手にも選ばれた千葉進也選手は次のように語る。

「昨年初めてキャプテンになった時は、分からないことも



たくさんありました。今年はチーム内のコミュニケーションを多くとることを心がけました。まだ成長段階の、より強くなるチームです。負けてはいけない試合に勝ち続けることができました」

同様に金井修也選手もコミュニケーションの重要性を指摘する。

「今年から正セッターになってプレッシャーはありましたが、苦勞したという感覚はありません。それは、コートの内外でコミュニケーションが図れ、自分が分からないこと、納得できない点について聞くことができたからです」

一方で、自分がやるべき仕事に集中することも大切だと伊藤信博選手と澤島雄一郎選手は語る。

「チームプレーの競技ですから、当然周りとの自分の調子が違うことがあります。以前は、自分でコントロールできない周囲の状態まで気にしていました。しかし、コートに入った人間が自分に与えられた専門の仕事を確実に実践することが一番大切だと気がつきました。選手全員がそうすることで、本当のチームワークが生まれてくると思います」（伊藤選手）。



中垣内 祐一 監督



千葉 進也 選手



金井 修也 選手



伊藤 信博 選手



澤島 雄一郎 選手



石島 雄介 選手



増野 彰 選手



木内 学 選手

「チームでは年長者になるため、自分自身の体調管理にも気をつけました。それぞれが力を最大限発揮できるコンディションに整えなければなりません」(澤島選手)。

他の選手たちが試合を振り返る中でその存在の大きさを称え、新人賞にも選ばれた石島雄介選手本人は、次のように振り返る。

「大学から、開幕当初4連勝でトップを走っていたブレイザーズに入り、私もチームの勝利に貢献したいと思っていました。ところが、加入直後チームが4連敗してしまいました。皆でミーティングし、外国から来た有力選手に頼りがちだった点を指摘しました。チーム全員が自分の役割を認識し、1つの統一した考え方を持ってから、チームが変わっていったと思います」

「選手全員に『負けたくない、負けられない』という気迫がありました。皆で同じ意識を共有していました」と増野彰選手は勝利のポイントを語った。

堺ブレイザーズ、そしてバレーボールの魅力

現在、選手17名のうち、新日鉄からの出向社員は3名、あとはプロ契約による選手たちだ。他チームの場合は、選手のほとんどが企業の社員で、プロ契約は2～3名にすぎない。

「勝って価値が決まるというプロの厳しさがありますが、その分皆真剣でチームとしての一体感があります」と増野選手は語る。堺ブレイザーズというチームの魅力について、選手たちはクラブチームとして多くの人に支えられている点だと口をそろえる。

「試合だけではなく、応援も他にはない面白さがあり、一緒に楽しむことができると思っています」(澤島選手)。

「衰退の一途をたどると言われる企業スポーツの中で、これだけ応援も含め一体感のあるクラブチームは魅力です。また“常勝新日鉄”を引き継いで勝ち方を知っている上に、新しい試みが多い冒険心のあるチームに参加できることに喜びを感じます」(伊藤選手)。

そして、選手それぞれに対する育成面でのクラブの姿勢も魅力だと石島選手は語る。

「北京オリンピック出場を目指しているのですが、強いチームとしての魅力はもちろん大きいのですが、海外も視野に入れている私のような選手個人に対し、その先まで考えてくれ

る一番の会社です」

試合にまだ参加していない選手の中でも、強烈なハングリー精神をもってブレイザーズの門をたたく人材をブレイザーズでは育てていこうとしている。木内学選手は、銭湯でアルバイトをしながらブレイザーズで練習に励んでいる。

「どうしてもVリーグでプレーしたいという夢をあきらめられず、堺ブレイザーズに入りました。苦勞して働いて学校に出してくれた親に報いるためにも、この経験から人間的に強くなり、たくさんいる同じポジションのレベルの高い選手の技を学び、いずれ試合に出て活躍したいと思います」

バレーボールの本当の面白さは実際に試合観戦して初めてわかると千葉選手は語る。

「試合会場で見れば、テレビで見るのとはスピードと迫力が違うことが分かります。決めたら点が入るので、展開が早く、飽きないと思います」

「バレーボールは、団体競技の中で、ボールを止めて考える時間がなく、常にボールが動いている状態です。そこが面白いところでもあります」(金井選手)。

「長い間バレーボールをやってきましたが、その魅力について、まだずっと探しているというところでしょうか。それほど奥が深い競技です。また、競技ですから、勝たなければ意味がありません。今後新日鉄のDNAをさらに進化させ、世の中のバレーボールの価値も引き上げていきたいと思います」(中垣内監督)。



試合結果(第12回Vリーグ)

2月

25日 3-1 vs 松下電器

26日 3-2 vs サントリー

3月

4日 3-0 vs 旭化成

セミファイナルラウンド

3月

11日 3-0 vs JT

12日 3-1 vs NEC

ファイナルラウンド

17日 3-2 vs サントリー

18日 3-2 vs サントリー

Vリーグ個人表彰式

4月14日に第12回Vリーグ個人表彰式が行われ、6名が個人賞を受賞した。

最優秀監督賞 ……中垣内祐一

最高殊勲選手賞 ……千葉進也

ベストリベロ賞 ……増野 彰

新人賞 ……石島雄介

ベスト6 ……千葉進也

金井修也

ロドリゴピント

クラブチーム化への挑戦

あらゆる分野の人材が 裏方として支える

クラブチーム化したことで、企業スポーツの枠を超えたあらゆる分野から積極的に人材が集まり、堺レイザーズを盛り立てている。筑波大学大学院でスポーツマネジメント論を学び教員から転じたBSC事業部担当部長の清川健一は、今年で入社4年目となる。

「学んできた理論を実践の場で生かす、またとないチャンスだと思いました。本に書いていない部分、リーグの改革、理念について一から生み出さなければならない点に苦労しています。5年かけて、まだようやくスタートラインに立った状態です」

堺レイザーズは、Vリーグ機構に働きかけ、ホームゲーム方式の定着やユニホームにつける広告の数も増やし、これまでの固定観念を打破してきた。

堺製鉄所の庶務担当として㈱ニッテツ・ビジネスプロモート大阪に勤務後、2年前から堺レイザーズを支えているBSC事業部事業課長の砂田博志は、新日鉄時代以上に地域での認知度を高める活動に取り組んでいるという。

「以前から試合観戦や製鉄所のバスツアーなどで地域の皆様と触れ合う活動を行ってきましたが、まだまだ認知度を上げていく必要がありました。市民フェスタなどに参加する中で年配の方にも声をかけていただくようになりました。今後積極的に地域のイベント等に参加し交流を図っていきたいと考えています」

また、新日鉄時代から20年来熱心なファンとして見守ってきたBSCの内田真理は、クラブ化に際し、BSC社員として協力したいと申し出た。

「クラブチームになったことで、これまでの企業スポーツでは絶対携われない仕事に参画することができました。サポーターズクラブの案内やグッズ制作を担当しています。まずはレイザーズを知っていただき、皆様に満足してもらえる企画を考えていきます」(※次項にプレゼント内容とグッズ紹介)



(株)レイザーズスポーツクラブ 事業部担当部長 清川 健一



(株)レイザーズスポーツクラブ 事業部事業課長 砂田 博志



(株)レイザーズスポーツクラブ 内田 真理

選手の食事管理でサポートする村田食堂

堺レイザーズの低迷期、選手の食事管理にも一因があることがわかった。堺製鉄所の方針で賄い付きの寮がなくなり、一人暮らしの選手個人がバランスの良い食事を常に心がけることは難しくなった。堺製鉄所の入り口にある村田食堂では、BSCの要請を受け、選手の朝食を担当することになった。

「新日鉄のバレーボールはフルセットを持ちこたえて勝つのが得意だったのに、昨年フルセットで負けたことから、スタミナを維持するために基本的な食事から見直されました。競技によって必要な栄養素も変わってくるので、栄養士の方から指示をいただきながら、図書館に行って勉強しメニューを作成しています」と、村田食堂の店主である川崎澄吉氏は語る。

選手の様子が手に取るようにわかり、次第に変わっていったと、奥様の寿子さんは言う。

「最初のときより、選手の皆さんも打ち解けて大きな声でありさつをしてくれるようになりました。以前より選手の目の色も変わって生き生きとしてきたような気がします。パートのおばちゃん達と息子を見るような気持ちで、破れた服の繕いをしたり、お誕生日にささやかだけれどプレゼントをあげたり…。調子が悪そうな選手がいたら、マネージャーの方とも連絡をとるようにしています」

もともとバレーボールが好きで、できるだけ多くの応援に駆けつけのお二人にとって、優勝したことに加えて感動した出来事がある。



堺市西支所祭り



村田食堂のみなさん(右より) 店主 川崎 澄吉氏 奥様 寿子さん
岡部 文子さん 美里 幸江さん

「リーグ戦が終わった日の次の月曜の朝、店の外に選手全員が整列して私たちにお礼を言ってくれました。感激して涙が止まりませんでした」(川崎氏)。

応援は最大の攻撃！ 地域密着の強力な応援団

一度試合を観戦したことがある人ならば強烈に印象に残るのが、堺ブレイザーズの応援団だ。応援団長を務める吉本興業の中田なおき氏は、テレビ番組をきっかけに中垣内監督と出会い、応援団長になってから5年が経った。

「応援に革命を起こす使命を持って団長になりましたが、芸人として舞台上に立つよりも、大勢の観衆の中でいかに盛り上げていくかを考えるのは大変なプレッシャーとなりました。芸人の色気を出しすぎても駄目で、最初の1～2年は葛藤がありました」

応援団としての役目は、選手を勇気づけるとともに勝利に貢献すること、ファンと選手との橋渡し役だと中田氏は言う。Vリーグの決勝では対戦相手に「応援で負けた」とさえ言わしめた。

「応援は手を抜かず、ハートでやっています。やはり日本人は、本当は前に出て応援したいのに、できないもどかしさがあると思うんです。その壁を取り払って巻き込んでいきたい。相手側に『あの77番うっとおしいなあ』と言われるのは、誉め言葉です。大林素子さんが解説中にブレイザーズの応援が

一つのソフトで、コート側から見て感じる圧力が違うとおっしゃってくださいました」

堺製鉄所の協力会社で構成された堺製鉄商友会では新日鉄時代から20年以上応援を継続している。前会長の後を継ぎ、応援を始めて今年で10年になる堺工機㈱代表取締役社長の磯田築氏は応援とともに地元市民のサポーター獲得のための支援を続けてきた。

「新日鉄時代から地方での試合にも応援に行きましたが、クラブ



応援団長
中田 なおき氏
(吉本興業)



堺製鉄商友会 会長
堺工機㈱代表取締役社長
磯田 築氏



海山第一町会長
宮崎 一氏

チーム化したことで応援の方法も模索しました。資金面からも支えていくために会員数を増やしました。できるだけたくさんの方に試合を見もらうため、堺市金岡公園体育館で行われたホームゲームでは、入場券を一部負担して1試合に100人集まるよう配って回りました」

同様に、地元市民の代表として応援に参加している海山第一町会長の宮崎一氏は、町内会の連合でソシオ会員を募り、運動会やサイン会など選手と市民との交流会にも協力している。

「クラブチーム化したことで、地域密着型になり、ぐっと身近な存在になりました。新日鉄自体との距離も縮まったように思います。勝ち進むことで、堺自体の良い宣伝になることも期待しています」

低迷期もずっと支えてきた応援団はVリーグ優勝により、喜びを共有することができた。この活躍が、普段のそれぞれの仕事にも良い影響を与えている。

「取引先の方は私が応援をしていることを知っているので、普段の仕事の話題作りにも役立っています。堺ブレイザーズは、若い選手の活力が魅力です。100の力を200にできる勢いを間近にすることがとても楽しく、頑張ったらできることを見せられると、自分達の仕事にも新たな力をもらうことができます」(磯田氏)。

「優勝のことを思い出すといまだに興奮します。一生忘れられない出来事の1位になってしまいました。幸せな団長だと思います。区切りがついたと同時に、また新たなスタートとして応援スタイルに磨きをかけていきます。ブレイザーズの応援で身についたしゃべりの呼吸や顔芸は芸人としても新たな発見が多く、今後企画している一人芝居、台本を書いて40分間1人で笑わせる芝居ですが、それにも役立てようと意気込んでいます」(中田氏)。



応援団長 77番 中田なおき氏



強力なブレイザーズ応援団

優勝記念Tシャツをプレゼント!! 希望者に抽選で10名様に

(L,XOサイズ)
氏名、住所、電話番号、サイズを
明記の上、下記宛にFAXまたは
はがきでご応募ください。

応募先
新日鉄総務部広報センター
〒100-8071
千代田区大手町2-6-3
FAX 03-3275-5611

提供
(株)ブレイザーズスポーツクラブ



ブレイザーズ
オリジナルグッズ
堺ブレイザーズのオリジナルグッズは
ホームページからも申し込みたいだけです。

<http://www.blazers.gr.jp>

青少年の育成—各方面から高い評価

青少年の育成を担うジュニアブレイザーズ

堺ブレイザーズでは、バレーボールの普及、トップクラスの選手の発掘、青少年の健全育成を目的とし、学校にバレーボール部がない中学生男子を対象にしたジュニアブレイザーズを組織している。近年、少子化の影響もあり、学校教育のクラブ活動が縮小傾向にある。堺市の中学80校中で、バレーボール部があるのは4校しかない。日本一のバレーボールチームを擁する堺市にバレーボール部が4校しかないのは、異常事態とも言える。

現在ジュニアブレイザーズには、堺だけではなく近隣市内も含め、子ども達が自ら積極的に参加している。BSCのコーチで、ジュニアブレイザーズの監督も務める酒井新悟は次のように語る。

「基礎から指導をしているので、小学校時代にバレーボールの経験がなくても全国のヤングバレーボール大会で他チームと遜色ない試合ができます。今年の春の高校バレーには2名輩出しました。子ども達には強制もしていませんが、やめるケースはほとんどありません。横でトップチームが練習しており、球拾いを手伝うこともあります。身近によいお手本があることは大きな強みです」

15年以上堺ブレイザーズのサポーターとしてボール拾いをしながら見守り続けてきた甲（かぶと）さつきさんは、ジュニアブレイザーズのマネージャーを担当している。

「ジュニア世代は成長期で、変声期、精神のアンバランス、反抗期などがあります。技術だけではなく、あいさつ、礼儀など社会人となる上で基本となる大切なことも教えていきます。1年生はまだ小学生の延長でふざけたり、落ち着きがなかったりしますが、1、2年経つと格段に成長します。卒業していくときの立派な姿を見ると感無量です」

現在、ジュニアブレイザーズでキャプテンを務めるのは、榎木貢君だ。

「テレビで全日本のバレーボールの試合を見て憧れ、ジュニアブレイザーズに入りました。ポジションはセンターです。キャプテンに選ばれて難しいこともありますが、勉強になります。憧れのブレイザーズの選手に技術やムード作りについて教えてもらいました。同じセンターの澤島選手を目標に、



BSCコーチ
ジュニアブレイザーズ監督
酒井 新悟



ジュニアブレイザーズ
マネージャー
甲 さつきさん

春の高校バレー出場、ブレイザーズ入団を目指します」

榎木君のお母様の裕子さんは次のように語る。

「皆さん広い地域から通っているので、いろいろな友人と仲良くできることが魅力のようです。最初は不安だったようですが、チームの役に立とうと努力しているようで、チームの皆さん、指導者の方には感謝しています」

地域社会の貢献に各方面から大きな共感

ジュニアブレイザーズの活動のほか、地域の青少年育成に貢献する取り組みも行っている。例えば、新日鉄堺製鉄所が行ってきた小学生スポーツ少年団の市内大会を引き継いだブレイザーズカップ、堺ブレイザーズの選手が子ども達に直接指導するバレーボール教室などがある。こうした取り組みは



ジュニアブレイザーズ
キャプテン 榎木 貢君



榎木 裕子さん



ジュニアブレイザーズの皆さん



各方面から高く評価されている。堺市教育委員会教育長の高橋保氏は次のように語る。

「堺は古代の仁徳陵の時代から中世には貿易で栄えるところにも、千利休や与謝野晶子など歴史を切り開く人材を輩出し、常にチャレンジ精神と自治意識に溢れたまちとしても知られています。今再び堺から世界へ出て行く人材を育てたいと考えており、こうした大きな目標に向かう上で、堺ブレイザーズが果たしている役割は言葉に尽くせないぐらい大きいものがあります。例えば堺ブレイザーズが昨年度本市中学校で開催して頂いたバレーボール講習会は77回に及びます。そのうえ、日本を代表する選手が毎回細かく指導報告書を記録し提出してくれており、これは宝だと思っています」

講習会終了後の生徒のアンケート結果によると、指導方法、雰囲気の良いには100%の支持が寄せられ、次回希望者は96%に達している。こうした結果を踏まえて高橋氏は次のように語る。

「今後もぜひ継続して欲しいと思います。学校はますます忙しく、教員のクラブ活動の指導には限界があります。子どもたちにとって、心を震わせるような魂に直接届く感動を得る機会が減っているように感じる今日、選手との交流は、一人の人生を変えてしまうくらい大きな出会いだと思います。選手の方にはセカンドキャリアのステージとしてもぜひ堺で生かしてもらいたいですね」

堺ブレイザーズのスポンサーである田辺製薬(株)ヘルスケア事業部担当顧問の中村泰三氏は、青少年育成への姿勢に共感したと述べる。

「田辺製薬は1678年創業の世界的に見ても歴史ある製薬会社です。過去に、サッカーや軟式野球等で輝かしい戦績を残すなど、企業スポーツへの意識が高い伝統があります。関西にある企業として、地域の活性化のお役に立つことに加え、青少年の健全な体力作りにも寄与しているブレイザーズの理念に賛同し、スポンサーになりました」

田辺製薬では、健康飲料『アスパラドリンク』を若者に向けて広くPRしている。

「ポジティブで前向きにスポーツに取り組む若い人への訴求効果を狙っています。今後も継続的にトップを走り、堺ブレイザーズの認知度が全国的に上がってほしいと期待しています」(中村氏)。



堺市教育委員会教育長
高橋 保氏



田辺製薬(株)
ヘルスケア事業部担当顧問
中村 泰三氏



堺市巡回バレーボール教室

スポンサー企業／田辺製薬(株)のアスパラドリンク



アスパラドリンクには、アスパラギン酸カリウム・マグネシウムをはじめ、ビタミンB群、タウリン、鉄分など、現代人に不足しがちな栄養素がバランスよく配合されています。特に、アスパラシリーズの特徴である「アスパラギン酸カリウム・マグネシウム」は、疲れた時に細胞内でおこる電解質バランスの乱れを整え、新陳代謝を活発にし、エネルギーの生産効率を高め栄養補給に役立ちます。味はすっきり飲みやすいフルーツフレーバーで、これまで薬っぽい味が苦手だった方にもおすすめです。

■効能：滋養強壮、肉体疲労・病中病後・食欲不振・栄養障害・発熱性消耗性疾患・妊娠授乳期などの場合の栄養補給、虚弱体質

■用法・容量：15歳以上、1日1回1瓶(100mL)

企業スポーツ維新—スポーツ振興の課題と展望

企業スポーツが経営の見直しの中で、休部をするケースは多い。企業スポーツ全体で見ると、有力な企業スポーツの数多くのチームが休廃部している。スポーツという文化を育てる中で、運営側と企業メセナとしての機能を十分生かせなかった企業側にも責任があるのではないかと、サントリー(株)スポーツフェローシップ推進部バレーボールチームゼネラルマネージャーの鳥羽賢二氏は指摘する。

「サントリーでは、創業者の利益三分主義(利益の3分の1は社会に還元し、3分の1は顧客へのサービス、そして残

り3分の1を事業拡大の資金とする)の精神のもと、芸術文化、スポーツ振興、福祉に取り組んでいます。これまで日本の社会はなかなかスポーツを文化と認めてこなかったように思います。今後は、スポーツチーム側から社内外に発信していく必要があるのではないのでしょうか」

サントリーでは2003年スポーツフェローシップ推進部を新たに設置し、翌年にはキッズドリームプロジェクトを立ち上げ、スポーツ・音楽・美術・環境などさまざまな分野において活躍する人々と、子どもたちが触れ合う機会や、子どもた



サントリー(株)
スポーツフェローシップ推進部
バレーボールチーム
ゼネラルマネージャー鳥羽 賢二氏



(財)日本オリンピック委員会常務理事
日本トップリーグ連携機構
専務理事
市原 則之氏



(財)日本バレーボール協会
全日本男子チーム監督
植田 辰哉
(元堺プレイヤーズ監督)



BSC常務取締役
小田 勝美

ち自身が体験・体感する機会を提供することで、次世代を担う子どもたちの“夢”や“挑戦する気持ち”を応援し、子どもを中心とする幅広いファン獲得を目指している。

「企業スポーツが衰退していく中で、堺プレイヤーズの進んだ活動は、大きなモデルケースとなり、刺激を受けています。PR方法などかなりご苦労されてきたと思います。社会貢献している会社は社員のモチベーションも上がるので、社内への理解はもちろん、ママさんバレーなど潜在的な競技人口の多いバレーボール自体が盛り上がるよう、共に議論し切磋琢磨していきたいと思います」(鳥羽氏)。

企業スポーツは維新の時期を迎えていると、(財)日本オリンピック委員会常務理事で日本トップリーグ連携機構専務理事の市原則之氏は語る。

「企業スポーツは、1社ではなく数社で抱えたり自治体と共同で運営するケースが出ており、いわば維新の時期にきています。スポーツは会社という枠から脱皮し、選手自身も自立しなければなりません。日本トップリーグ機構では、『ニッポン復活プロジェクト』として、団体ボール競技復活を図るためバックアップしています。今回の堺プレイヤーズのVリーグ男子優勝、女子ハンドボールのクラブチーム広島メイプルレッズの活躍など成果が現れ始め、嬉しく思います」

JOCが2001年に策定した、10年間でメダル数を倍増することを目指すゴールドプランの委員長として、日本の選手育成の構造についても指摘する。

「ゴールドプランの目標は3年で達成できました。メダル数が落ちた理由について、豊かな時代の若者が軟弱になったという声がありましたが、実際は指導者が育っていなかったことが大きな要因でした。産業構造で製造業が伸びていた時代は、企業側の『ものづくりは人づくり』という精神がスポーツ分野にも生きていて、選手と指導者をじっくり育てる風土がありましたが、第三次産業の隆盛時には簡単に海外から有名選手・指導者にお金をつぎ込んで呼ぶようになりました。いつの時代も、『ものづくりの精神』を忘れてはならないと思います」(市原氏)。

今後のバレーボールの盛り上がりは、2008年の北京オリン

ピックでの活躍が大きく影響するだろう。元堺プレイヤーズ監督で当社社員で、現在(財)日本バレーボール協会全日本男子チームの監督を務める植田辰哉は、堺プレイヤーズに多くの期待を寄せている。

「今回のVリーグについて、堺プレイヤーズは、チームに勢いがありました。あと何試合やっても優勝したと思います。チームにとって人材は大切な宝ですが、石島の加入、千葉のリーダーシップなどを挙げても、素晴らしい人材がいると思います。ナショナルチームは絶対に負けられないチームとして、人材を集めなければなりません。7月から始まる代表リーグで、いろいろな選手を試していきたいと思います」

スポーツは楽しむものだが、競技スポーツに楽しみはないと言いつける。

「世界一苦しい練習をしてこそ、世界のトップになれます。よく食べ、寝て、練習するという日本バレーの伝統の哲学を持つ小田部長の影響力が生きた、堺プレイヤーズに期待しています」(植田氏)。

企業スポーツ維新の士として、堺プレイヤーズの存続と成長に貢献してきたBSC常務取締役の小田勝美は次のように抱負を語る。

「今日までご声援、ご支援いただきました各企業や、ファンの皆様に感謝いたします。堺プレイヤーズは、多くの人々に『夢と感動』を与え、地域に密着した新たな企業スポーツ像を目指して頑張っています」

サポーターズクラブ入会案内

ソシオ (Socio) とは、ラテン系の国で「仲間」「クラブメンバー」という意味で使われています。

ソシオ個人会員：年会費 1口 10,000円 (消費税込み)

ソシオ法人会員：年会費 1口 50,000円 (消費税込み)

個人事業主会員：

年会費 <10000円単位> 30,000円以上 (消費税込み)
平成16年11月より新設。

堺プレイヤーズへの協賛にご協力いただける「商店・医院・飲食店など個人経営者」を対象にご入会を受け付けて頂きます。(特典は別項)

フレンズ会員：年会費 1口 3,500円 (消費税込み)